

Title	京都の町家におけるコミュニケーション：招かれざる訪問者
Author(s)	丹羽, 結花
Citation	デザイン理論. 2004, 45, p. 19-32
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/52880">https://doi.org/10.18910/52880</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 京都の町家におけるコミュニケーション — 招かれざる訪問者 —

丹羽 結花

キーワード

京都, 表屋造り, 出会い, もてなし, いけず

はじめに

1. 表屋造りの町家
  2. 豊かなコミュニケーション
  3. 崩れゆくコミュニケーション
- おわりに

## はじめに

近年、京都の町家は、単なる「老朽木造家屋」ではなく、魅力的な「京町家」として再評価されている<sup>①</sup>。しかし、少なくとも昭和30年代までは普通の住まいとして町並みを形成していた。長年住み継がれてきた町家の中には多くの人々が共に暮らし、様々な他者を受け入れ、あるいは排除する仕組みが息づいていた。本稿では、町家内部で繰り広げられるコミュニケーションの仕組みに焦点を当てる。コミュニケーションには、住人と訪問者の出会いにおける挨拶など言葉だけではなく、ものの受け渡しなどお互いの行為も含める。少なくとも戦後しばらくはありきたりのことであり、一部の町家では今なお引き継がれている数々の仕組みを参与観察やインタビューにより採り上げ、分析する。考察を通じて独自のコミュニケーションの仕組みを持っていた住まいとしての町家を見直すことができるであろう。

## 1. 表屋造りの町家

町家の中でも、大規模で最上級の表屋造りを探り上げる(図1)。平屋の玄関棟を間にして、店棟と主屋の3棟から構成されている。通りに面した店棟で商売を行い、主屋の最も奥に正式な座敷がある。主屋のトオリニワに面した1列目は主に家族の私的な空間であり、2列目は訪問者を迎える空間に分かれている。また、人が出入りする玄関が複数存在する<sup>②</sup>。

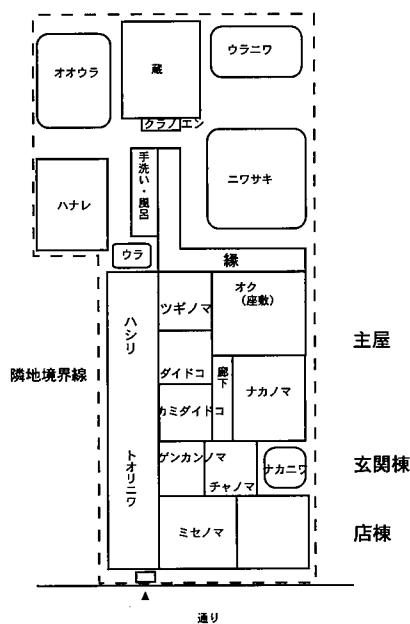


図1 表屋造りの間取り

店舗併用住宅、いわゆる大店であり、戦前までは大家族の他、奉公人など多くの人々が共存していた。また、訪問者としても商売関係者を始め、様々な種類の人々が入り出した。彼等の行き来を整理するための仕組みが極度に発達していたと考えられる。

先行研究から本稿の目的を明らかにしておこう。コミュニケーションは社会的に見ると「つきあい」に近い。町内のつきあいを空間利用の側面から明らかにしたものに島村昇他『京の町家』の研究がある<sup>(3)</sup>。昭和40年代、町家が建ち並んでいた最後の時期の現地調査に基づく分析であり、訪問者が侵入可能な場所は行事などにより確定していることを明らかにしたが、具体的なやりとりは採り上げていない。具体的に採り上げたのは、上田篤『京町家 コミュニティ研究』である<sup>(4)</sup>。ほぼ同時期、ヒアリング調査

を含めた現地調査により、町内のコミュニティという視点から、つきあいの状況や住人の語りを分析し、地域の特徴を捉えている。本稿では、つきあいという次元で関係性や町内を見るのではなく、具体的なレベルでコミュニケーションの実態を検討することから、表屋造りの町家の特性を見ていく。また、コミュニティという共同体の視点ではなく、住人を主体として、住まいの内側から訪問者を迎えるという視点をとる。

マンション建設が景観問題として採り上げられるようになった平成以降の鉾町地域を扱ったものとして、建築の分野では、谷直樹・増井正哉他『まち祇園祭すまい』がある<sup>(5)</sup>。町内会や保存会の構成、家や町会所のしつらえについて、詳細なフィールドワークを行っているが、個別のやりとりには言及していない。社会学の立場では、佛教大学総合研究所『成熟都市の研究』がある<sup>(6)</sup>。ヒアリングを始めとした社会調査により、住人の商売や町の運営などを具体的に採り上げ、分析している。コミュニティの視点から、住人が鉾町を支えようとする努力を抽出しており、町の位置づけは明確であるが、個々の住まいのあり方としては考察されていない。京都のつきあいや作法を採り上げた一般書は数多く、事例は豊富だが、伝統的、因習的な視点が強い。京都人の特性として扱われているが、町家との関わりについて捉えているものは少ない<sup>(7)</sup>。

本稿では今まで取り扱われることが少なかった表屋造りの町家に焦点を当て、住人の立場から、現在の状況を踏まえた上で、過去の仕組みを見直していく。住人を主体とすることにより、

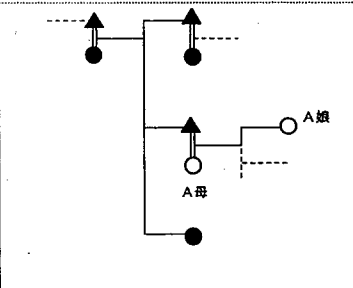
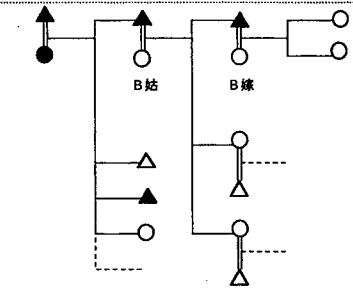
	A家	B家
建築年代	明治初期	明治後期
居住	近世以降継続	昭和初期転居
元の商売	老舗（卸兼小売り）	呉服関連卸
商売の顛末	昭和50年代、先代死亡により廃業。	戦中、七・七禁令により先々が廃業。
その後	平成以降、生活体験の場として、予約者に限り、料理などでもてなす。	戦後、ミセノマなど表貸し。 昭和60年代より市民活動団体の事務局、さらに平成以降、年中行事など体験の場として提供。
調査概要	平成9年、インタビュー。  平成10年より年中行事の参与観察。  平成11年以後、イベント、年中行事などに随時参加、インフォーマルなインタビューを行う。	平成8～9年、年中行事を中心とする参与観察及びインタビューを行う。 平成10～12年、週1回程度訪問して、日常の参与観察を行う。 以後、会合など月2回程度、多忙時に随時往訪、インフォーマルなインタビューを行う。
家系図		

表 対象となる町家の概要

訪問者との緊張関係が浮かび上がり、住人がコミュニケーションをコントロールする状況が明らかになるであろう。

対象とする2軒の町家は祇園祭の鉾町地域に現存する(表)<sup>6)</sup>。明治期に建築された後、改装・増築もなされたが、構造や間取りに大きな変更はない。先代当主は祇園祭関係の役員を務めていた。現在、亡き当主の代わりに中心的役割を担っているA娘及びB嫁が主な調査対象者であり、情報提供者である。いずれも生活様式は現代の一般的なものも採り入れているが、コミュニケーションに関わる仕組みについては、比較的旧来の方法を維持しながら、近年、新しい試みを行い、従来にはない一般の訪問者を受け入れる機会が増え、様々な摩擦も起きている。即ち、コミュニケーションの仕組みは既に崩れつつあり、危機感を覚えた住人だからこそ、調査対象として最もふさわしい。

## 2. 豊かなコミュニケーション

### (1) 町内の人々

訪問者の種類により、出会いの場所は自ずと決まる。対象町家において数十年前には普通に機能していた仕組みをみておこう。まず、町内の人々について、典型的な事例として約40年

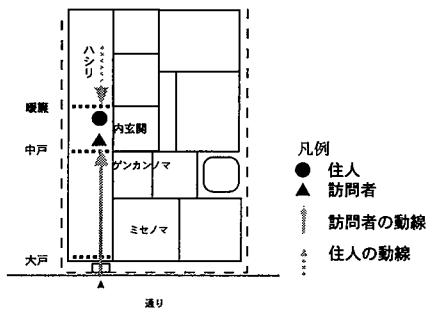


図2 隣家を訪れる

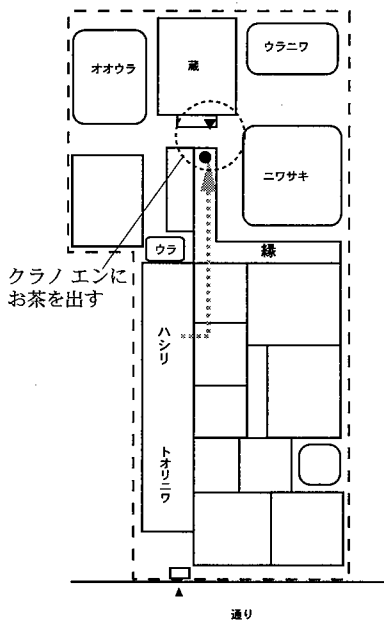


図3 お出入りの人々

前のA娘の体験を紹介する。

春の彼岸にはヨモギ団子を作り、仏壇に供えた後、近所へ「おすそわけ」した<sup>9)</sup>。小学生になると近所へ配る役目が回ってくる。A母がよそゆきの菓子鉢にヨモギ団子を盛りつけ、よそゆきの縮緬の風呂敷に包んでA娘に渡ししながら、口上を伝授する。A娘は口上を復習しながら、数メートル離れた、同様の表屋造りである隣家の戸口に到着する(図2)。

一枚目の重いガラス戸を開け、トオリニワへ踏み込む。日中、表の戸は施錠されていない。ミセサキ、ゲンカンサキのニワと次々と通り過ぎ、二枚目の戸を開ければ、ハシリの入り口がある。自宅とは場所が異なるが、隣家では表貸しを行っていたため<sup>10)</sup>、「ここまでは回覧板を持って入ってもよい」内玄関がある。「こんにちは」と声をかけ、先方の夫人が出てきたら、玄関先に鉢を下ろし、風呂敷包みを取り、「お口よごしですけど、おひとつどうぞ」という口上を述べる。夫人は「お手間入りをいつもご丁寧に。ちょうどいます。ちょっと待っててくださいやっしや。」と丁寧に受け答え、一旦奥のハシリへ戻る。きれいに洗った鉢の中に白い半紙に包んだ「おため」<sup>11)</sup>を入れ、再び内玄関に現れ、風呂敷で包み直し「お家のかたにどうぞよろしゅう言うといとくれやす。おおきに。」という挨拶。A娘は丁寧に

お辞儀を返し、隣家を辞す<sup>12)</sup>。

このように町内の家を訪れる場合、家の造りや用件に応じて、内玄関の手前、あるいはゲンカンサキのニワで声をかける。回覧板は、一声かけて、内玄関の上がり框に置き、顔を合わせずに帰る。ハシリより奥へは入らないが、手前に目印として暖簾がかかっていることが多い。おすそわけや相談事があるときには、先方の住人がトオリニワに下足で、あるいはゲンカンノマへ出て、挨拶するまで待つ<sup>13)</sup>。回覧板やおすそわけというもののやりとりを利用することにより、先方と会うことができるのである。

少々気心が知れた夫人同士の場合、ゲンカンノマの上がり框に「端近<sup>はしちか</sup>ですけどどうぞ」と座

布団を勧める。訪問者は履き物を脱がずに腰をかけ、おしゃべりに興じる<sup>90</sup>。戦前は表屋と路地家屋の違いなど家の階層差が歴然としており、お互いの家あるいは人間関係によって許される特別なことだった<sup>91</sup>。

## (2) お出入りの人々

定期的に家の手入れや内向きの用件で出入りする職人やご用聞きがいる。彼等は、ハシリまで、あるいはウラへも入ることができる<sup>92</sup>。魚屋や八百屋などのご用聞きは、週に数度、注文を取り、再び商品を届けに来る。ゲンカンサキで「こんにちは」と声をかけ、住人の応答がなくとも暖簾内のハシリまで入って待つ。時節のものを言われなくても用意したり、大皿に盛りつけたり、というサービスも商売に付随して行う<sup>93</sup>。

大工や植木屋はトオリニワを抜けてウラまで直進する<sup>94</sup> (図3)。トオリニワは土足で行き来できるため、履き物を脱がずに作業場へ赴き、縁側などに腰をかけて休憩することができる。住人は昼時に茶、10時と3時におやつを用意し、蔵の前や廊下、縁の続きに「どうぞ、お三時です」ともてなす。職人と話す機会にもなっており、相談や仕上がり具合を確認する一方、職人からメンテナンスの方法を授かるなど、お互いのコミュニケーションを図る。

## (3) 商人

店舗併用住宅では、商人の出入りがコミュニケーションの仕組みの基本であり、町内の人々や職人を除いた一般訪問者の基準となる。昭和50年代後半まで商売が続いていたA家の使い分けを紹介しておこう。

通常、訪問者は立ったままミセサキで用事を済ませる。住人はミセノマに座って対応するが、時には上がり框に用意した煙草盆や座布団を勧める (図4)。訪問者は履き物を履いたまま、框に腰をかけて一服する。

込み入った話の場合、訪問者は案内に従い、ゲンカンから履き物を脱いで上がり、チャノマに座る (図5)。ゲンカンノマには、いつ訪問があってもよいように屏風をたて、季節の生け花をしつらえる。緑や風のあるナカニワに面しているからこそ、チャノマが接客の場所にふさわしいと考えられたのであろう。茶や菓子をふるまうが、訪問者は菓手に手をつけてはいけない<sup>95</sup>。

正式な招待を受けた客や重要な商談の場合はオクの座敷へ通す。間にあるナカノマは当時住人の居間であり、プライバシーを確保するため、後の改築により座敷へ直通する廊下をとりつけた<sup>96</sup>。座敷の床の間には、季節に応じた軸をかける。書の軸で場を引き締めることもある。花や屏風も状況や時節に応じてしつらえ、時には香をたく。ガラス障子に広がるニワサキも座

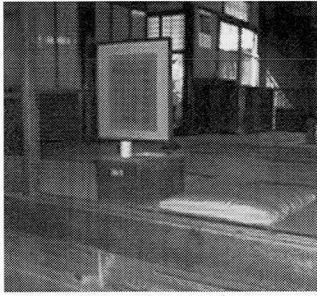


図4 ミセノマの上がり框



図5 チャノマ



図6 正月のゲンカンノマ

敷にふさわしい景色として洗練されてきた<sup>21)</sup>。食事は住人が作るのではなく、仕出し屋を呼んで接待することが最高のもてなしであった。当主が応対し、他の家族が臨席することはない。

#### (4) 親戚や来客

年中行事や仏事など、「なんぞごと」のときと呼ばれる特別な場合がある<sup>22)</sup>。親戚を始め、多くの来客を受け入れる機会である。

正月の年始参りは当主の役目であった。昭和40年代頃までは、B家の当主も町内や近隣の知人、商売上の客など、袂が名刺で重くなるほど、数多く訪れたという。住人は訪問者のためにゲンカンノマを特別にしつらえる(図6)。「松に雪」の屏風を飾り、段通<sup>23)</sup>を敷き、上がり框には緋毛氈を敷く。手あぶりと名刺置き、座布団を用意する。前節のミセノマの対応と同様、一服を勧めるものだが、これより奥には招かないという意思表示でもあり、ほとんどの訪問者はゲンカンサキで失礼する。当主も年始回りのため留守の場合が多く、挨拶もせず、名刺だけを残す訪問者も多い。

正月の座敷は訪問者のためではなく、家族一同で祝うためのしつらえである<sup>24)</sup>。床の間には「初日の出」などめでたい絵柄や家の神様を祀る掛け軸、生け花は若松、三ケ日は毎朝灯明を上げる。いつもとは異なる厳粛な雰囲気があり、家族の年始の挨拶の後は、にぎやかな座敷となる。

対照的に祇園祭では、ほとんどの訪問者をオクの座敷まで通す<sup>25)</sup>。来客が多かったB家の当主は町内の仕事で多忙にも拘わらず、通りで知り合いを見かけると「お祭ですのでどうぞ」と気軽に招き入れていたという。「屏風祭」と称されるほど、表のミセノマやオクの座敷には「とっておき」の屏風が披露される。網代や籐むしろ等、夏の敷物の上に段通を敷く。花は緋扇、一年で最も華やかな場所となる。

日中には薄茶と菓子、夜にはビールとおつまみ、軽い食事でもてなす。宵山には夕方以降の訪問が一般的であり、昼は多くの来客を避ける心遣いのある人々が訪問する。日常とは異なり、

飲食に預かる方が礼儀に適っており、通常の「京のぶぶ漬け」とは異なる<sup>98</sup>。「お祭ですのでどうぞ」とは、儀礼的な挨拶ではなく、祭ならではの特別なしつらえを見て欲しいという、住人の意思表示なのである。

心得た訪問者は「おもたせ」いわゆる手みやげを用意する。酒やビール、菓子を用意する人が多いが、住人にとって最もありがたいのは「お初穂」と呼ばれる金封である。金や酒は町内のご神体へのお供えとして預かり、後ほど町内へ寄付する。祭の接待は町内のご神体や祭神である祇園さんのお祝いなのである。帰り際に返礼としてちまきを渡す<sup>99</sup>。

多くの親類がそろう法事では、仏間で法要の後、親類一同にお供養の膳を準備する。B家では50人もの縁者をもてなしたことがある。続きの間との取り合いの建具をはずし、一体の空間とする。周囲に段通を敷き回して座れば、仕出しを呼んで会食することができた。

「なんぞごとのとき」には、家に伝わるお決まりのしつらえを行い、訪問者を迎える。季節や行事に応じた花や掛け軸などを用意し、よそゆきの座敷を整える。特に段通は、部分的に空間を際立たせたり、座る場所を特定したり、使い勝手がよく、重宝する。

以上の考察の結果、次のことがいえよう。開放的な造りと言われる町家において、住人のプライバシーを守るためには、一定の場所までしか訪問者を受け入れないという仕組みが必要である。お互いが了解していれば、多様なコミュニケーションが気まずい思いをせず、滞りなくできるのである。訪問者にとっては、履き物の脱ぎ着が一つの分岐点となる。また、年中行事が場所やもてなしの内容を左右することも重要であろう。

同時にコミュニケーションがより円滑に運ぶように建物や装置を工夫してきた。建築に備わっているものとしては、トオリニワの位置づけがある。接する部屋との位置関係、敷居や土間との段差などにより、場所性が明確である。庭が見える場所も重要な要素である。表屋造りの主屋を2列に分けたこともデザインの一つである。

差異を際立たせる装置として、建具や屏風、暖簾などのしつらえがある。もてなしと同時にそれ以上先には入れない拒絶の意味をも示す。典型的なものとして、ハシリの手前にある暖簾、上がり框の煙草盆や名刺置きがある。屏風にも奥の物を隠す、それより奥は見せないという役割がある。

物のやりとりも重要な要素である。職人のもてなしのようにお互いのコミュニケーションを促すきっかけにもなる。訪問者の手みやげは、住人との関わりの深さを示し、お互いの理解度を暴露する。コミュニケーションには、住人と訪問者の共通理解に基づき、町家という造りを活用しながら、場所をコントロールする仕組みが備わっているのである。



### 3. 崩れゆくコミュニケーション

#### (1) 訪問者の変質

類似した、かつ差異のある町家が並び、各家や住人の階層差が歴然としていたからこそ、コミュニケーションの仕組みを維持することができた。しかし、戦後、町家をめぐる環境は物理的にも社会的にも変化する。近年まで老朽家屋と見なされてきたのは、戦後の建築基準法改正により違法建築となり、以後建て替えられるべき建物となったためである<sup>89</sup>。昭和40年前後から、合法的な中高層のビルやマンションへの建て替えが進み、現在、町家が中高層ビルと混在する状況は普通の光景である<sup>90</sup>。また、女中や丁稚の住み込みがなくなり、家族も郊外へ移住するなど、職住分離が見られ、町内や家における住人構成が変化した。

住まいの基盤が変化すると共に訪問者の質も変化する。路地と表屋、借家人と家持ちの違いを始めとする、町内の人々の階層差が表向きは消えた<sup>91</sup>。夜間人口が減少した町内に昭和60年前後からマンションが急増し、旧住人よりも多い新住人が一度に町内へ移り住むようになった。お出入りという仕組みも途絶えつつある<sup>92</sup>。商売の環境が変わるとともに、A・B両家とも、自身の商売は閉め、商用の訪問者が消えた。

コミュニケーションを成立させていた舞台や人々が変われば、表屋造りは必要ではなくなる。大規模な町家は消えていくが、同時に希少となった表屋造りに対する興味も高まってきた。ニーズに応えざるを得なくなったA・B両家は、予約者に限り、体験会や会合の場所として住まいの一部を提供するようになり、従来の来客と同様の扱いで、一般人という新しい種類の訪問者を受け入れるようになった。

#### (2) 優遇される訪問者と招かれざる訪問者の分別

では、どのように対処してきたのか、この10年の取り組みの中で特に多くの訪問者を受け入れる祭の状況を見ていこう。B家では平成8年、宵山にのべ180人の訪問者を迎えた<sup>93</sup>。賓客から、知り合いを介して訪れる人々まで、一様にもてなすわけではない。

まず、場所を変えるという方法がある。数組の訪問者が重複した場合、親しい訪問者を、一番格が高い座敷ではなく、ハナレや蔵、ウラニワなど、別の場所に案内し、くつろいでもらう(図7)。動線としてトオリニワを利用すれば、他の訪問者に知られずに別室へ移動できる。キッチンやウラニワなどの裏方には手伝いとして参加する別種の訪問者がおり、繁忙を極めているが<sup>94</sup>、家元関係や住職など、別格の訪問者を案内することがある。通常目にはできない別世界で、ときには手伝いに誘う。「誰でも入ることができないからこそVIP席」と見なすことができる訪問者へのもてなしであり、本来のもてなしを知っている訪問者だからこそ、場所の格付けが逆転するという趣向を楽しむことができる。

たとえば料理など、見た目で格差をつけるのは好ましくない。代わりに人間関係で優遇し、望ましい訪問者同士を引き合わせることもある。仕事関係など、ある訪問者にとって有益となりそうな人々の来訪を事前に知らせ、日程を調整し、両者を引き合わせる。あるいは旧知の訪問者が住人にふさわしいと考える人々を紹介がてら連れてくることもある。B家の内部では様々な社会的つながりが生まれ、広がるのである。

コミュニケーションを利用することにより、好ましくない訪問者を遠ざける方法もある。訪問者は住人に対して他家の状況を語り、そこで居合わせた訪問者の評価も含めて情報交換を行う。しつらえの評価とともにふさわしくない対応や振るまいが語られる。訪問者はまちなかで起きている最新情報を町家の奥に運び込む、貴重な存在なのである。悪い情報や噂は、住人や居合わせた訪問者の間で即座に広まる。別の家を訪問した人々は同じ話を語り、その住人や同席者にも情報を流す。広がった噂はいずれ関係者により当の本人の耳にも入るであろう。自分がふさわしくない訪問者とみなされているという自覚があれば、以後訪問することはかなわない。知人の間でも評判を落とすことになる。間接的にダメージを与える、時間差のあるいけずなのである。

### (3) 招かれざる訪問者が示すもの

このような自覚のない人たちが、町家にとっては最もふさわしくない、招かれざる訪問者である。コミュニケーションがあることを理解できない、あるいはしようしない訪問者が近年順に増加している。

一般の観光客には、拒絶の言葉や装置が意味をなさない。A家には表のガラス戸を勝手に開けて突然訪れる訪問者が後を絶たない。「うちは公開してませんのでね。普通に住まいしてますので。」という住人のやんわりとした断りを意に介さない。祭には表のミセノマが町内の飾

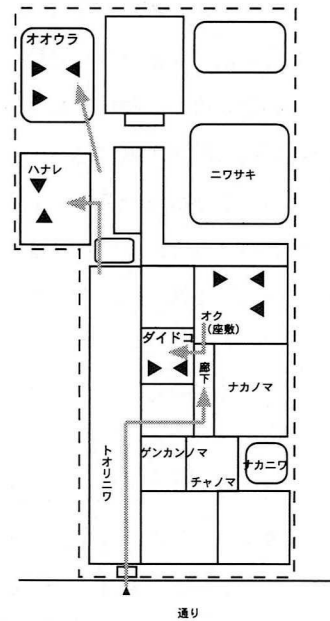


図7 祭礼時の動線

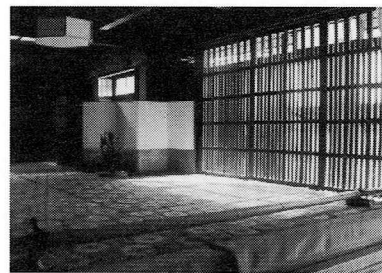


図8 ミセノマの結果

り席になるためか、黙って家に上がり込む訪問者も少なくない<sup>69</sup>。不用心なので、2年前から結界や進入禁止の棒をおき、無粋であるが見た目で撃退することにした(図8)。

町家に興味を持ち、題材として研究・活動する訪問者の中に基本的なコミュニケーションの仕組みを無視したまま入り込み、自分の家のようにふるまう人々が多く、住人を悩ませている。作法を守る必要がない特権的な立場にいると考えているようだ。取材に来る人たちも同様、暮らしの記録をとりながら、自身は作法を守らない。従来の範疇にはなかった訪問者の存在が問題なのではなく、彼等の存在こそ、かつての町家の仕組みは建物や両者の理解が一体となっていなければ成り立たないこと、一体となって町家の住人を守っていたことを反証している。

以上、まとめてみると、本来、コミュニケーションの仕組みは新しく参入してきた人たちにもわかりやすい、合理的な仕組みであった。自分の立場と場所の特性を考えれば、訪問者のふるまいは自ずと決まる。新しい訪問者を受け入れることができたのも、この仕組みを援用することができたためである。現在、町家の減少や訪問者の変質により、仕組みを支えてきた要素が壊れ、コミュニケーションが崩壊しつつある。一つには町家に対する住まいとしての認識が一般的には欠けているところに原因がある。また、近年の変化に応じて住人の対処を考える場がないという問題がある。変化が急激であり、新しい試みも始まったばかりである。本稿は解決策や将来への提言を目的とはしていないが、今後の課題となるであろう。

## おわりに

町家の魅力を再考しておこう。昨今急増している、町家ショップといわれる改造町家と比較すると問題が明確になるであろう。昔の雰囲気、形の取り合わせ、空間の使い方や読み替え、大胆な改装など、様々な創意工夫が住まいとしての町家を「町家ショップ」へと変えていく。住まいとは異なり、販売や飲食などサービスの場には、コミュニケーションの仕組みや秩序は必要ない。サービスに対して対価を支払いさえすれば、誰もが利用でき、ある程度自由にふるまうことができる。町家ショップの増加により、町家という存在は有名になったが、住まいとしての理解がますます難しくなるという矛盾が起きている。

町家の存在を支えてきたコミュニケーションの仕組みが失われても、形だけが残ればいいのだろうか。そのとき建物は「町家」なのだろうか。ある住人は、面倒なことも住まいと一緒にあるからこそ、町家を守っている、という<sup>69</sup>。逆にそれがなくなれば、存在の意味はないともいう。もはや現在の町家には、かつて存在していた豊かなコミュニケーションの残骸があるだけに過ぎない。しかし、町家には、現代の「普通の家」では包括することのできない、社会的なつながりや広がり、複雑な人間関係が整然と詰め込まれていた。同時にコミュニケーションの仕組みに適合するようにデザインされてきたものが表屋造りなのである。言い換えれば、表

屋造りという様式の確定へと導いた隠れた主要因は、コミュニケーションの仕組みだったのである。

#### 註

- (1) 建築大辞典第二版の町家の定義は「室町時代以後においては町地にある商職人の住屋の総称」である。京町家という表現は京都ブランドの一つという扱いである。近年、京都市関係が行った調査以来、「戦前までに伝統工法で建てられた木造家屋」という定義が一般的となってきた。路地家屋や長屋、専用住宅や改造町家、看板建築も含めると、平成11年時点で都心部には28千軒の町家が残存していた。京都市都市計画局『京町家まちづくり調査集計結果』1999年。
- (2) 住人や訪問者が出入りする場所は、属性によって分かれている。客として招かれた人や当主は、玄関棟にある来客用の玄関から出入りする。大規模な町家ではさらに正客用と商用の二つに分かれる場合もある。内玄関は家族が使う玄関である。
- (3) 島村昇・鈴鹿幸雄他『京の町家』鹿島出版会、1971年。
- (4) 上田篤『京町家 コミュニティ研究』鹿島出版会、1976年。
- (5) 谷直樹・増井正哉編『まち祇園祭すまい』思文閣出版、1994年。鉾町とは、もともと鉾出し町であり、山がある町は山出し町と呼ばれていた。現在は両者の総称、あるいは四条烏丸を中心として鉾町が多く存在する地域を示す。
- (6) 佛教学総合研究所『成熟都市の研究』法律文化社、1998年。
- (7) 言葉に焦点を当てたものとして、寿岳章子『暮らしの京ことば』朝日新聞社、1979年、河野仁昭『京ことばの知恵』光村推古書院、2002年など。住人自身が作法との関わりで披露している最近のものに、山中恵美子『よそさんは京都のことを勘違いしたはる。』学習研究社、2003年、及び小島富佐江『京の町家 丁寧な暮らし』大和出版、2004年など。
- (8) 現在普通に家族が暮らしており、匿名とする。間取りや家族構成など、考察に影響しない部分については脚色を加えた。著書などの記録が一部公開されているが、プライバシーに配慮し、引用や写真・図版は、必ずしも対象家族のものではないことを断っておく。
- (9) 先立って河原や御所でヨモギを摘む。灰汁抜きをしてゆで、蒸し上げた団子生地にあわせてつきあげる。楕円形に型押ししたのち、粒あんをはさみ、半月形のヨモギ団子を作る。他に生地のまま白いもの、ニッキを混ぜたもの、以上3色の団子を作り、仕上げにきな粉をふる。京都関連の随筆では、ヨモギ団子ではなく、ばた餅の記述が多い。大村しげは「お彼岸には、お茶の子というて、仏さんのお供養に、親類やら隣近所へおはぎを配った。おはぎは萩の餅。お重にはいっているのを、こどもはかしこそうな声を出して「こんにちは、お彼岸さんのお茶の子でございます」そしておだちんをもうろうて帰ると、もういっぺん「ただいまはおおきに」とお礼に行く。」と書いており、彼岸のおすそわけは一般的な行事であった。朝日新聞京都支局編『あんなあへえ』1974年、220頁。
- (10) 住まいを輿に移し、通りに面したミセノマなどを貸すこと。テナント貸しである。商売を閉め、隠居

やサラリーマンになった場合、ミセノマは必要ではなくなる。A家の隣家は昭和50年代まで表貸しを行っていた。B家では戦後、現在に至るまで数社に貸してきた。

- (11) 飴などの駄菓子や駄賃のこと。
- (12) 暮れの餅つきにも同様に「こころみの餅」と呼ばれるあん餅をおすそわけする。口上は「おことうさんでございます（忙しくて大変ですね）。こころみのもちです。おひとつどうぞ」。
- (13) 敷地の奥にある蔵で作業をしている場合など、ゲンカンサキからの問いかけに気がつかないことが多い。訪問者は相手が中にいるとわかっているにもかかわらず、内玄関より奥へ入ることはしない。A娘によると、数年前、町内の路地に住む痴呆症状のある老女がゲンカンサキで回覧板を持ったまま立っており、それほど身に付いていた習慣であることを思い知らされたという。同様に、宅急便などの業者が、携帯電話から「今、表にいるんですが」と電話をかけてきたこともあるという。
- (14) 帰り際に訪問者は「おやかまっさんどした」という挨拶を残す。お騒がせ致しました、という他の家族への断りでもある。
- (15) 西陣のある女性の語りでは「お向かいの去年90歳で亡くなったおばあさんが「〇〇（伏せ字は筆者による）はんとこ、暖簾から中、入れてもうたことあらへん。おばあさん死なはってから気楽に入らせてもらえるわ」言うてね、しょっちゅう見えられました。（義母が）ガンとして「暖簾から中は人、いれたらいかん」いわはるんです。」京町家再生研究会編『京町家の暮らし 京町家ブックレット』1999年。
- (16) 町家住人の手記として、吉田孝次郎「昭和25年頃か、ようやく食糧も出まわって、私は鳴海餅でアルバイト。餅屋の小僧は祝餅を届ける特権で常は入り込めない家々の走りもと（ハシリ、いわゆる炊事場のこと）へ潜入を許され、よそ様の住まいぶりを実見することができた。」木の文化都市研究グループ（代表 東樋口護・宗田好史）『トヨタ財団助成 木の文化都市 中間報告』1996年、49頁。
- (17) 祭や正月など、各家の料理に合わせて、お決まりのものを用意する。刺身などは大皿に美しく盛りつけて届ける。後日、住人は洗った皿を魚屋へ返すというやりとりもある。B家に出入りする魚屋は、祭礼時に大量のビールや食材を冷やすために必要な氷を届けるようになった。
- (18) ウラは道具などの物置にもなる。
- (19) 他家でもものを食べることは失礼と見なされている。住人が帰り際に半紙などで包んで訪問者へ渡す。生菓子など持ち帰りができないものは、その場で頂く方がよいとされている。
- (20) B家は明治後期に建てられており、玄関から座敷へ到る廊下が当初から設計されていた。主屋に階段を二カ所設けるなど、住人の動線を配慮した造りになっており、近代以降も町家には様々な工夫と改変が加えられていたことがわかる。
- (21) 座敷に面したニワサキには、松など季節を問わない常緑樹が植えられていることが多い。いつでも訪問者をもてなすことができるようにという工夫である。梅や紅葉など季節を感じさせるものも少ばかり植えられている。ナカニワやゲンカンサキのニワには、棕櫚竹など少ない光で緑をもたらすものが植えられる。
- (22) いわゆる冠婚葬祭をさす言葉であるが、残念ながら、冠婚葬についてのヒアリングは不十分であり、

後の課題と致したい。

- ②3 「鍋島」とも呼ばれる一畳敷きの木綿のカーペット。数枚を一組として、数組を準備している家が多い。現在生産されておらず、家に伝わるものを大切に使用している。
- ②4 普段は当主以外が飲食をすることはない。座敷にはいることを許されていない子供も正月には一緒に会食する。A娘も子供の頃、母が着物で正装していること、番頭が改まった口調で他人行儀な挨拶を述べること、などいつもとは異なるかしまった雰囲気に緊張したという。年長者あるいは当主による「ごいっとうさんにおめでとうさん」（一同おめでとう）の挨拶が終わると急に場の雰囲気がなごみ、家族揃って祝い膳を囲んだという。特別な訪問者は家族が緊張とくつろぎを感じる座敷へ招かれ、薄茶と花びら餅など、正月の菓子でもてなされる場合もある。
- ②5 A家では当主存命中、訪問者をオクへ通すことはほとんどなかった。表のミセノマが町内の飾り席となっていたため、訪問者も遠慮するのか、ゲンカンサキで声をかけて、立ち話の後、そのまま帰っていったという。
- ②6 「ぶぶ漬けでもどうですか」と住人に声をかけられても真に受けてはいけぬ、というしきたりの一つである。筆者は調査を始めた頃、B家から嫁に出た娘の一人に「うちではどうぞといえども本当に母がもてなしたい、と思っているので、遠慮しないでいいですから」とアドバイスされた。通常はおもてなしに預かってはいけぬという習慣の反証である。
- ②7 ちまきはもともとお礼に渡すものであり、販売が一般的になったのは戦後である。今でも、巡行時、お伴の知人から「本日はおめでとうございます」と扇子に載せたちまきを頂くといい場面がある。寄付については、所定の領収書がある町内もあり、金額に応じて手ぬぐいやうちわなど、返礼として渡すことが決められている。
- ②8 最たる違いは、伝統工法では一つ石の上に柱を立てるが、戦後の在来工法ではコンクリートで固めた布基礎に柱を緊結する必要がある。町家の工法については、京町家作事組編『町家再生の知恵と技 京町家のしくみと改修のてびき』、学芸出版社、2002年。
- ②9 昭和30年代後半から昭和の終わりにかけて、建て替え状況を事例研究したものとして、伊従勉・丹羽結花・船附久美子「京都都心部における町家と街区の空間構成の変容について：戦後の都市計画法制が歴史都市にもたらしたもの」人間・環境学第8巻、1999年、25-56頁。
- ③0 戦後、持ち家志向が高まり、路地家屋の多くが個人所有になる。拙稿『近代・京都まちなかの土地所有の変遷——二つの町を事例として』人文（京都工芸繊維大学工芸学部）第52号、2004年、149-159頁。
- ③1 お出入りを継続している職人も住人への気遣いから、昼は外食、ペット飲料を持ち込み「構わないでください」と言い、お互いのやりとりする機会が消えていく。職人が来ている時はわずらわしいので家を留守にするという住人もいる。やりとりに関しては、ものについても「よそゆき」が死語になり、使い捨て容器を使用すると、器の往復ともになされるコミュニケーションが消える。「おすそわけ」する先もなくなってしまった。
- ③2 新しい取り組みにより知人の幅が広がり、年々多くの訪問者を受け入れるようになった。3年後には

300人に達した。平成16年には初めて事前に問い合わせのあった来訪者を選別し、一部断ったことから、150人におさえた。

- ③ 日常からつきあいがあり、家の実情を理解する人々で、住人が内向きの雑用を任せることができる。筆者が参与観察の拠点としたのが裏方であり、裏方で手伝う人々は平成10年頃から組織化されてきた。裏方の様子ややりとりの詳細については、拙稿「京都まちなかの町家における住み手と他者とのやりとりについて——祇園祭のもてなしを中心として——」人文（京都工芸繊維大学工芸学部）第50号，2002年，141-166頁。
- ④ 数年前、筆者が滞在していた昼間のわずか1時間に、ミセの上がり框に腰をかけておしゃべりしながら飲食する人たち、黙ってミセノマの上がり框から靴を脱いで上がりこむ人たち、暖簾の内側をわざわざ覗き込む人たちに遭遇した。ある町家ではお供えのちまきを持ち帰った人がいたという。また、一般の人々には断りもなく、表でスケッチしたり、写真を撮ったり、格子の寸法を測ったりする場合もある。ファサードも家の一部であり、中へ踏み込まなくとも一言挨拶が必要である。
- ⑤ 「共存していかなければここに住んでいるものがなくなってしまうえば、これは単なる墓場みたいなもんですよね。生活者がいなくなった家になんの魅力があるのかしらと思うし、私自身自分のいなくなった家がね、いつまでもこの状態で残っているほど不気味なものはないような気がして、そういうの見るのはいやですね。」京町家再生研究会編『京町家の暮らし 京町家ブックレット』1999年。

#### その他引用・参考文献

小島富佐江『京町家の春夏秋冬 祇園祭山鉾町に暮らして』文英堂，1999年

京都市『京町家再生プラン——暮らし・空間・まち——』2000年

新谷昭夫，神崎順一（写真）『京町家』光村推古書院，1998年

杉本秀太郎『洛中生息』みすず書房，1976年

#### ホームページ

京町家ネット <http://www.kyomachiya.net/>

秦家 [http://web.kyoto-inet.or.jp/people/hata\\_ke/](http://web.kyoto-inet.or.jp/people/hata_ke/)

#### 図版出典

間取り図については、個人提供図面から筆者作成。

写真は、個人（複数）提供。